

田沢湖高原雪まつり



大雪像「西郷どん」。



会場には、たくさんの屋台が軒を連ね、美味しい香りが漂いました。

2月17日・18日の2日間、たざわ湖スキー場特設会場で「第47回田沢湖高原雪まつり」が開催されました。

恒例の雪中宝探し大会や、ゆるキャラステージショー、日本トップ選手の岡田亜佑美さんによるスラックラインのパフォーマンスなどが行われ、来場者を楽しませていました。

夜には雪像がライトアップされた中、仙北市の小正月行事や花火などが行われ、会場は幻想的な景色に包まれていました。

今年初開催の『汁一椀グランプリ』では、8出店者からこだわりの1杯が提供され、来場者は体を温めながらお気に入りの1杯に投票し、屋台村田舎料理なかや(秋田市)の「日本海秋田ずわい蟹汁鍋」が、初代グランプリに輝きました。



大人気の『ゆるキャラ』が勢揃い！

2018 冬まつり

魅力いっぱい 寒さも吹き飛ばす



なるか

悪天候のため、お焚き上げやわらたいまつ行進は残念ながら中止に。地元の方々を訪れ、揚げパンやうどんを買い求めていました。

3月2日、市役所田沢湖庁舎駐車場で田沢湖生保内地区に古くから伝わる小正月行事『なるか』が行われました。

この行事は、稲わらに火をつけて振り回し、1年の豊作を願うものです。当日は、強風のためにお焚き上げやわらたいまつ行進を行うことはできませんでしたが、揚げパンやうどんなどを楽しみに、会場には家族などが訪れていました。

なお、お預かりした「しめ飾り」「門松」などは、後日、お祓いのうえお焚きあげします。



中里のカンデッコあげ

3月2日、中里塞之神堂前(松木内字中里)で「中里のカンデッコあげ(県指定無形民俗文化財)」が行われました。

参加者は、カンデッコ(朴の木で作った小型の鎌と男根をかたどったクルミの若木を縄で一對に結んだもの)をご神木に投げかけ、子宝や縁結びなどを祈願しました。



簡単そうに見えるカンデッコあげは、うまく枝にかけるにはコツがあるようです(上)。当日は、約200個のカンデッコが用意されました(左)。

まちづくり日記

No.129

『少しでもお役に立てるなら』

仙北市長 門脇 光浩

3月は旅立ちの季節です。小学校も中学校も高校も卒業生を送り出し、新入生を迎える準備が進みます。子どもたちに限らず、転勤だったり引っ越しだったり…。お店や会社、農家も春に向けた作業で多忙です。加えて今年は大雪で、排雪作業もかなりの難儀です。

先日、角館高校の卒業式に出席しました。243人の卒業生は、一人ひとりが未来です。40年くらい前に、私もその中の一人でした。感じたことのない開放感と多くの不安…。校長先生や来賓の皆さまからは、大切なお話があったはず。ところが全く思い出せません。同じように、後年になって私の祝辞を思い出せる人がいるかどうかは疑問です。でも人生の先輩として、少しでもお役に立てるなら、次のようなお話をしました。以下は概要です。

「～皆さま一人ひとりは、他の誰でもない、世界で唯一の存在です。他人との比較では何も生まれません。戦うべき相手は自身です。少しづつ上手いかなんかなくても、決して自身を過小評価しないうえへください。可能性に勝手に限界をつく

らないでください。家族や友人、社会への思いやりや感謝が、皆さまをさらに大きく成長させるエネルギーになります。辛いときは、周囲と重荷を分け合ってください。決して恥ずかしいことではありません。強さは変化を恐れない心の持ちようです。夢を諦めない信念です。それぞれの郷里、秋田県、そして国家の支えとなるよう、いつまでも挑戦者でいてください。世界に目を開いてください。追い求める者は、諦めない限り、たとえカタチが変わっても、必ず納得できる結果に巡り会えます。それが人生の真理です。仙北市は、今後も国際文化都市として成長を続けます。今後も皆さまからお力をお借りしたい場面がたくさんあります。ぜひ皆さまの将来ステージに、仙北市を選んで欲しいと思います。」

高校生だけでなく、多くの皆さまにお伝えしたい思いです。

人生は、本当に人それぞれです。一人ひとりが、各々の幸せを手に行ける人生になって欲しい、その市民の誰もが願っています。その中には協力者もきついです。みんな頑張れ！

かくのだてフィルムコミッション

ロケーションだより

Kakunodate Film Commission

かくのだてフィルムコミッション (仙北市観光課内) ☎43-3352 <http://kakunodate-fc.jp/>

2月10日から12日にかけて開催された第27回あきた十文字映画祭に参加してきました。

あきた十文字映画祭のスタッフとは、秋田県内の撮影支援の際に、エキストラの手配等でお互いに協力しあう関係で、日頃から交流を深めています。

映画祭当日は、吹雪の悪天候にもかかわらず、たくさんの観客が訪れ、映画はもちろん、映画監督や出演者の舞台挨拶、トークを楽しんでいました。映画「パーフェクト・レボリューション」で車いすの身体障がい者役を演じたリリー・フランキーさんは、トークショーで、「手書きの看板が昭和の雰囲気があり、タイムスリップしたようだ。自治体や市民が作りあげていることは、地方の小さな町が見習うべきところだ」と話していました。外の文化と内の文化



大雪の十文字映画祭。

のよいところを取り入れて更によくしていく話をお聞きし、かくのだてフィルムコミッションも外の映像文化を取り入れていく活動に関わっているの、今まで以上に情報発信の必要性を感じました。

映画関係者も参加する交流会では、東北芸術工科大学学長の根岸吉太郎監督と直接お話しする機会に恵まれました。著名な映画人の方々の意見を聞くことができることは大きな収穫です。そういった意味でも、様々な会に積極的に参加していきたいと思いました。

近い将来、かくのだてフィルムコミッションが撮影支援を行った映画が、あきた十文字映画祭で上映されることを期待し、更なる活動を続けていきたいと感じました。

(会長 坂本 洋)